

特集ワイド

「特集ワイド」へご意見、ご感想を tyukan@mainichi.co.jp ファクス 03-3212-0279

吉本ばななさんらを育てた名編集者

根本昌夫さん

言葉で自分を表現したい。いい文章を書きたい。物語書に限らず、本が好きなら誰もがそう思うことだろう。でも、どうしたらうまく書けるのか。「日本一の小説の師」と称される編集者、根本昌夫さん(67)にその神髄を聞いた。

【藤原章生】

根本さんは文芸誌「海燕」「野性時代」の編集長時代に吉本ばなな、島田雅彦、小川洋子、瀧名秀明ら各氏のデビューに携わった。小説教室の人気講師としても知られ、最近の生徒には、2017年下半年の芥川賞を受賞した「百年泥」の石井遊佳さん、「おらおらでひとりいぐも」の若竹千佐子さん、さらには16年にオール読物新人賞を同時受賞した佐々木愛さん、嶋津輝さんらがいる。

西新宿でお会いした根本さんにはまず聞いたのは「恥」についてだ。根本さん「『耻』という小説教室」で作家、角田光代さんにご質問しているからだ。>>>以前、群像新人賞を受賞した男性と同じタクシーで帰ったことがありました。その彼が、もたらしたばかりの賞状を私に差し出してご質問です。「ぼくはうちに持って行けません」「どうしてですか。これ上げます」「どうしてですか。恥ずかしいじゃないですか。恥ずかしい吉行淳之介さんも「小説を書くことは、銀座の町なかを裸で逆立ちして歩かへらひ恥ずかしいこと」と。角田さん、恥ずかしいですか。>>>(一部略)

これに角田さんは恥ずかしいです。大学で文芸科に進みながら、小説を書いていることが、級友たちに一切言わなかったんです。親にも言えなかったです。親にも言えなかったです。私に知り合いの作家には「もともとみんな小説書きまじょう」と言う人もいますが、内恥ずかしいと思ってる人は



吉本ばななさん



島田雅彦さん

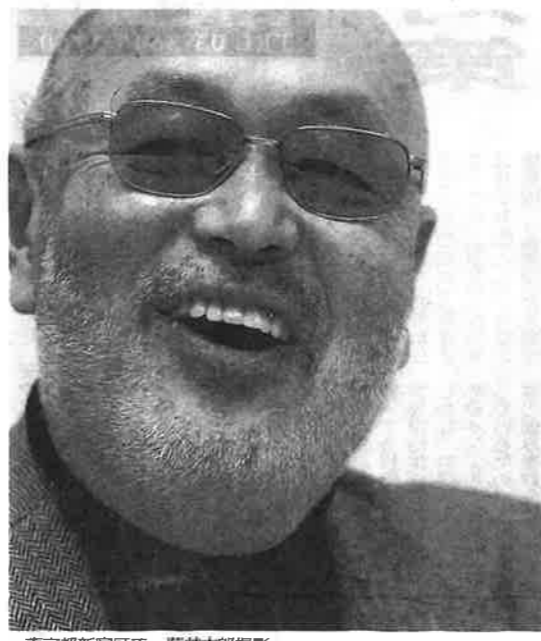


若竹千佐子さん

根本昌夫さんが指導、デビューに携った主な作家と作品

- 吉本ばなな 「うたかた/サンクチュアリ」「白河夜船」「アムリタ」
- 島田雅彦 「優しいサヨクのための嬉遊曲」「亡命旅行者は叫び泣く」「最終上映」「新化」
- 石黒達昌 「純愛映画 山田さん日記」「王様の耳」
- 竹野雅人 「アンダーソン家のヨメ」「チョコレート・オーガズム」
- 野中 稔 「太陽の側の島」「海猫ツリーハウス」「姉といもうと」「ひどい句点」「東京首論日和」「黄金の庭」
- 高山羽根子 「犬のかたちをしているもの」
- 木村友祐
- 嶋津 輝
- 佐々木愛
- 湊 ナオ
- 高橋陽子
- 高瀬隼子

小説は書き手の本質さらす



東京都新宿区で、藤井太郎撮影

「ソナタ」(1988年、青山南編・訳)によれば、作家のガリシア・マルケスは自身が携わったジャーナリズムと小説の違いについて聞かれ、<いな、話の出しどころもおなじ、素材もおなじ、技量も言語もおなじ>と話している。でも、根本さんによれば、純、エンタメに限らず小説はジャーナリズムとフィクションよりも「書伸び」がちな分、書き手がさらけ出されるというところだ。

「ノンフィクションはある意味、筆者が真実を押しつけているわけだ。全てが(言葉)なる前の(原形通りに)書けるわけじゃない」。そう、新聞記事だって同じだ。書き手が構成を考え、取材対象の言葉を運び、それを「事実」と称しているが、原形のままではない。「例えは井伏鱒二は小説『黒い雨』で、記録や手記、うわさ話などをコラージュのように組み立てています。構造、手の内をバラしている。小説では、創作のプロセスを書くという面がありますから」。手の内をバラすことが結果的に書き手の本質をさらすことになる、恥ずかしいをさらすということだ。

書いているものと書きたいものの距離 埋める手伝いが仕事

「どの法則」と呼んでいる。どんな人たちのか。「自分が生きてる世界、どこにどの存在があるか」と感じて、自分に何か足りないと感じて、書く衝動に駆られる人たちが、それを感ぜなければ、小説なんて書かなくてもいい、読むこともないかもしれない。「確かに時々、絶対に小説を読まないという人がいる。」

「小説はうそだから読まない人は多いですね。要は、現実と折り合えない気分や、感受性が豊かすぎる人が小説に向かう。今までの小説では飽き足らないというの、100の欠乏感です。例えは吉本ばななの『キッチン』。今では当たり前ですが、若い女性の口語体まじりの文章で当時はずいぶん斬新だった」

大切な人を失った喪失感の中、どう生きるかというテーマは後の若竹さんの「おらおらでひとりいぐも」に通じる。「夫を失った自分を方言や内なる声など三つの声でつむいでいって、喪失を描く中で小説の王道です」

こうした作品に関わる時、根本さんは「文章指導は一切ない」。作品を読んで才能を見抜くこともないと言っている。<僕が編集者だから、この人が本当は何を書きたいのかというところはわかる方だと思えます。すると、書いているものと書きたいものの距離がわかり、それを埋める手伝いをしているんです。>